

平成29年度 岡山芳泉高等学校 学校経営目標とその目標を達成するための具体的取組

①学力向上と進路実現

担当	具体的方策	評価Aの基準	中間評価	最終取組結果	最終評価	結果の分析及び改善方策
教務	・授業評価アンケート項目に、授業の振り返り、評価に関する項目を導入する。 ・44期生の総合的な学習の時間について、高大接続推進委員会とグローバル人材育成推進委員会および進路指導課と連携して探究活動を中心とした取組を推進する。 ・授業公開期間中に各教科の代表者が研究授業を実施する。	・授業の振り返りの時間を設ける教員が80%以上となった。 ・総合的な学習の時間の指導体制が確立し、本年度実施分を再検討し、1月までに45期生の実施計画が完成した。 ・公開授業を振り返るための教科会議を年間2回以上実施した。	B	・授業の振り返りに関する項目について、後期教員アンケートでは82.0%が肯定的回答をした(前期は78.9%)。 ・総合的な学習の時間については、高大接続推進委員会と連携して探究を重視した活動が展開できた。 ・45期生の総合的な学習の時間について、実施計画を作成した。 ・公開授業を振り返る教科会議を6月及び11月に実施し、情報の共有が図れた。教科代表による研究授業は芳泉コミュニケーションデーを中心として実施し、その後の教科会議では指導案について活発な意見交換ができた。	A	・生徒授業評価アンケートの全項目について後期の数値が前期と比べて向上しており、授業改善が進んでいることがうかがえる。今後は教科を越えての情報交換や共有を進めることができるような取組を検討する。
進路	・高大接続推進委員会と提携し、探究型・教科横断型の課題研究を研究する。(難関大学に対応したカリキュラムの開発) ・メモリーをより使用しやすい形式を研究し、改良を加える。 ・高大接続改革に伴い改革された各大学のA0・推薦入試のポートフォリオの活用方法を研究する。	・「総合的な学習の時間」で探究的な課題研究が行われた。 ・生徒アンケート等により、メモリーを改良することができた。 ・ポートフォリオを活用したA0・推薦入試に合格者を出した。	B	・「総合的な学習の時間」を探究的な課題研究につながるよう計画・実施した。 ・アンケートによりメモリーの課題記入欄を、活動記録に変更するとともに、最初のページに記入例をつけ、利用しやすくした。 ・ポートフォリオを活用したA0・推薦入試において、芸術系および文学系で、1月末時点で2名の国公立合格者を出した。	A	・「総合的な学習の時間」については、高大接続推進委員会と連携をとり、本校の形はつくることができた。今年度の反省を活かし、次年度1年次生でさらによいものに改良を行う。 ・より効果的なA0・推薦入試のポートフォリオの活用方法並びにeポートフォリオについて研究する。
図書	・「総合的な学習の時間」と連携して、探究的学習や課題研究の際の題材探しや研究に必要な図書の利用を促す。 ・NIE実践指定2年目となるため、生徒が校内で新聞記事に触れる機会をさらに増やし、新聞記事に対する意見を生徒が表明する機会も増やす。	・生徒一人当たりの年間図書貸出冊数が8冊を超えた。 ・新聞記事に触れる機会と、新聞記事に対する意見を表明する機会をそれぞれ年間10回以上設定できた。	B	・1月末時点の貸出冊数 1人平均7.16冊(昨年度よりも約1.5冊増) 1月末時点の図書館授業 167回(昨年度よりも36回減) ・図書委員会と1・2年次LHRで、新聞ブリックを1回ずつ実施した。この取組の7か月間や課題作品を、「いっしょに読もう!新聞コンクール」に計347名、「おかやま新聞コンクール」に計346名、山陽新聞ちまた欄投稿に計12名応募した。また、図書館や1年次のNIE掲示板、図書館だより、文化祭の展示等を通じて、「Share Opinions!」を含む新聞記事に対する意見表明を20数回実施した。独自に、SHRや授業の始まりを使った「生徒による気になった新聞記事紹介」を、複数のクラス・授業で行った。	B	・「総合的な学習の時間」の芳泉ゼミにおける参考文献調べ等の効果もあり、1・2年次生を中心に図書貸出冊数が回復した。次年度は、やや減った図書館授業を増やすなどして、貸出冊数のさらなる増加を図る。 ・新聞記事に対する意見を表明する機会を地歴・公民科の教員の協力により年間20回以上設定できた。次年度はNIE実践指定校の指定は外れるが、1年次の授業や総合的な学習の時間の担当者等と連携をとりながら、新聞の有効活用を図る。
1年次	・メモリーを活用することを通じて、自己の学習状況や日々の生活を「見える化」し、自己改善の一助とさせる。 ・各種講演会や体験学習に積極的に参加させ、ポートフォリオを作成することを通じて目標意識や目的意識を高める。	・アンケートで「メモリーを活用することが自己管理に有効だった。」の項目において肯定的な回答が80%以上であった。 ・家庭学習状況調査で、平日と休日の平均で200分以上であった。 ・ポートフォリオを提出させることで参加状況を把握し、講演会や体験学習に参加する者がのべ80名以上であった。	B	・生徒アンケートの結果、肯定的回答は54%と、目標に届かなかった。 ・10月の学習実態調査では、平日と休日を合わせた学習時間平均は約194分と5分のマイナス(6月比)、1月の学習実態調査では約191分であった。 ・ポートフォリオ作成状況について、中間報告させた時点では、各クラスの半数弱の生徒が何らかの講演会や体験学習に参加している。	B	・メモリーに記入している生徒は多いが、それが「自己管理」につながるかどうかは生徒自身もわからないというのが現状である。メモリーの効果的な活用方法について、語らせたり考えさせたりすることが必要である。 ・学習時間を増加させるために、他教科の時間を減らすことなく、英語の時間増を図りたい。自主課題を増やすなど、生徒の向上意欲に資する方策を提示していく。 ・今年度は、ポートフォリオの作成に慣れることを中心にした。来年度は、進学の際に直接利用できるように、志望に直結したものを作成する。
2年次	・メモリーの活用の定着を図るため、授業、年次集会、講演会など多くの場面で、生徒・教員がメモリーを持参し、記入を促し、活用させるようにする。 ・ポートフォリオの活用を定着させるため、積極的に講座・講演会・実技体験などに参加できるよう情報提供を行い、参加者やポートフォリオ記入の有無の把握をする。	・アンケートで「メモリーを活用することが自己管理に有効だった。」の項目において肯定的な回答が80%以上であった。 ・講座・講演会・実技体験などに参加した生徒のワークシートの提出率が80%以上であった。	B	・学校アンケートの結果、「メモリーによる自己管理」について肯定的な回答は43.3%であった。昨年より改善され、年次集会・講演会でメモリーを見るようになったが、積極的にメモを取る生徒はまだ少ない。 ・約半数の生徒は何らかの講演会・講習会などに参加し、ポートフォリオのワークシートを作成し、担任へ提出した。その後、各自で管理している。	B	・様々な機会でもメモリーを持参できるようにはなっているので、今後はメモを取る場面を適宜指示するなどして、メモを取る習慣の確立を図る。 ・ポートフォリオ活用の定着化を図り、活動記録に基づいたA0・推薦入試の志望理由書・自己推薦書の作成に生かしていける指導を検討する。
3年次	・メモリーのSHR、面談ウィーク、年次集会での活用を徹底していく。日々の計画・評価の欄の活用を促し自己の伸長と進路実現へつなげる。	・アンケートで「メモリーを活用することが自己管理に有効だった。」の項目において肯定的な回答が80%以上であった。	B	・生徒アンケートを実施し、週1回以上何らかの利用で72.8%が使用していると回答した。前年度の39.5%より大きく改善されている。	B	・担任等のメモリー活用の働きかけにより、年次集会・講演会・SHR・日々の予定・学習の計画等、日常的に使用ができていた。
国語	・ループリック評価を作成し実施する。	・ループリック自己評価を生徒に各学年で1回以上実施した。	A	・ループリック評価のひな形を作成し、1年次で7回、2年次で5回、3年次で8回実施した。	A	・ループリック評価を含め、振り返りを進めてきているが、評価を踏まえての授業構成までには至っていない。今後は、評価と目標の一体化を考え、3年間を見通したカリキュラム構成を考えていく。
地歴公民	・アクティブラーニングを取り入れた実践、検証を行う。	・それぞれが取り組んだ内容を教科会議で共有し、成果を記録に残した。 ・目標設定、発問、思考を促す支援、評価(ループリック含む)の効果的な事例を蓄積し、スタンダードを作成した。	B	・アクティブ・ラーニングの実践の中で、深い学びを実現するために授業の終盤で学習内容をまとめ直して表現する手法の有効性を教科会議で共有することができた。 ・教科のスタンダードは作成できなかった。	B	・科目間で目標や取組の方法など、相違を前提とした上でスタンダードを作成する。
数学	・授業アンケートにおけるA項目(生徒の自己評価)に対して、教科としての評価基準(判断基準)を具体的に作成し、アンケートを実施する。	・前年度と同様に行った前期アンケート結果をもとに、教科会議を通じて判断基準を作成する。 ・後期アンケートを実施し、前期と後期の差異を検討することで、次年度に向けて授業の取り組み方の基準(スタンダード)が完成した。	B	・教科会議に授業アンケートの際に判断しやすい基準を作成し、後期授業アンケートを実施した。 ・教員側が想定していたものと差異はなく、生徒の自己評価は妥当であると考えられる結果が得られた。 ・教科のスタンダードは作成できなかった。	B	・生徒の自己肯定感が低い(自己評価が厳しい)と予想していたが、教員が想定していたものと大きく差がないことが分かった。この結果をもとに来年度は具体的な数値目標を設定するとともに、教科のスタンダードの確立を目指す。

理科	<ul style="list-style-type: none"> 授業、補習中にタイムに「課題設定」「問い立て」を行わせ、クリティカルシンキングを行わせる。 各種コンテスト、サイエンスキャンプ、大学のオープン講座を積極的に紹介することで、生徒の参加を働きかける。 	<ul style="list-style-type: none"> 疑問や興味に基づくキーワード調べや言い換えから、リサーチクエストを仮説、根拠、手法と合わせて設定できる。 H30年度の課題研究（学校設定科目）を複数名が履修を希望した。 H29年度のサイエンスキャンプ、各種コンテストへ複数名参加した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> クリティカルシンキング、リサーチクエストは、総合的な学習の時間と連動させて夏期課題として取り組ませた結果、約80%の生徒が仮説、根拠、手法と合わせて設定できるようになった。 来年度2年次課題研究履修を3名が希望した。 GSCO(グローバルサイエンスキャンプ)カマヤ4名、サイエンスキャンプ13名、岡山物理コンテスト18名が参加した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 教科書を知識として教えるだけでなく、科学的思考方法を習得させるために、「動機付け」や「問い」を工夫しているが効果は不明瞭である。今後は、ルーブリックもしくはルーブリック的な評価や振り返りの取組を浸透させ、評価と目標の一体化を進める。 2020年に向けて教材や指導方法の見直しを進める。
英語	<ul style="list-style-type: none"> 各年次において生徒に身につけさせたい資質・能力(自分が伝えたい情報や考えなどを受け手に対して適切に伝える能力)、それを実現するための授業の進め方について共通理解を図り、単元や題材のまとまりの中で内容を関連づけて指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各年次での定期的な打合せ等を通じて、授業の進め方について共通理解が図れた。 資質・能力を身につけさせる学習活動を、単元や題材のまとまりごとに1回以上実施した。 前期の学習活動によって身につけた資質・能力を分析し、後期の指導方法を改善した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 概ね各年次で授業の進め方や評価について、共通理解をはかって進められた。 資質・能力を身につける学習活動を複数回行った。単元のまとまりごとに1回ずつ実施した年次もあった。 授業アンケートや調査等の結果を基に内容の改善を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に身につけさせたい資質・能力について教科全体・各年次で議論を深める。 授業の進め方や学習活動については、研究授業や講座等に参加し情報収集に努める。 活動の成果の把握については、GTEC等の外部検定を活用する。
学力向上事業推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 次期学習指導要領改訂の方向性を踏まえ、AL(主体的・対話的で深い学び)のさらなる研究・実践を行うとともに、全教科でルーブリック評価の研究と実践を行う。そのために、外部講師を招聘し、評価に関する教員研修を行い、授業の質的改善に向けて共通理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師による教員研修をもとに、評価を意識した授業改善が進み、ルーブリック型の授業振り返りシートを活用した教員が60%、ルーブリック自己評価で生徒が能力の向上を意識できたという生徒が80%に達した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師による評価方法に関する教員研修を実施した。 教員アンケート結果(1月) Q1 授業(調査も可)の振り返りで、自己評価(ルーブリック評価等) <ul style="list-style-type: none"> ①単元や定期調査ごとに1回以上実施した…45% ②1回は実施した…20%(①、②の計65%) ③研究はしたが、授業等で実施するまでには至らなかった…24% ④研究も実施もしなかった…11% Q2 振り返りシートや自己評価を取り入れることによる効果 <ul style="list-style-type: none"> …肯定的回答96% 生徒授業アンケート、 <ul style="list-style-type: none"> 【授業評価】思考が深まる問いかけがあり、考える時間がある。 <ul style="list-style-type: none"> …後期3.53/4点(前期3.48、前年後期3.43) 【生徒の自己評価】授業に意欲的に取り組んでいる。 <ul style="list-style-type: none"> …後期3.52/4点(前期3.49、前年後期3.45) 	A	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果から、教員の授業改善・充実の意識の高まりが、学校全体に広がっているといえる。そのことが、生徒の授業に対する意欲・関心の向上につながっているといえる。 これまでの授業改善の取組をさらに深化させていくためには、生徒に身につけさせたい資質・能力についてより明確にするとともに、前年11月に全国実施された新テストの試行調査(プレテスト)で問われている力について共通理解し、それを踏まえた授業改善を図り、合わせて、指導と評価の一体化の観点から、思考力・表現力を測る調査問題の作成、評価の在り方(ルーブリック評価等)をさらに研究していく。
高大接続推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 探究型・科目横断型の課題研究を研究する。 大学教員による特別講座への生徒参加とポートフォリオの作成・保存を推進する。 国際バカロレア認定校から講師を招いた研究授業を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「総合的な学習の時間」で探究的な課題研究が行われた。 大学教員による特別講座が4回以上開講され、参加生徒がポートフォリオに保存した。 国際バカロレア認定校から講師を招いた研究授業を2回実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「総合的な学習の時間」を探究的な課題研究につながるよう計画的に実施した。 大学教員による特別講座が4回開講され、参加生徒がポートフォリオに保存した。 国際バカロレア認定校の福山英数学館において、担当者から生徒12名が授業を受け、その様子を本校教員2名が見学した。 大学教員から指導助言をいただいたり協議を行ったりすることで、本校教員による土曜特別講座「知の理論」を8回開き、国際バカロレア教育の手法を導入した探究的授業を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な仕組みやありかたはほぼ確立した。今後は、「総合的な学習の時間」の内容の充実と指導技術の向上を目標に検討する必要がある。「総合的な学習の時間」と「知の理論」の特別講座や大学教員による特別講座との関連性を強めると共に、教科の授業での関連性を強める研究を行う。
人権教育推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 多様な分掌・教科との情報交換の場を設定することで、NIE事業を活用したALと人権教育・主権者教育の連携を深化させる。 	<ul style="list-style-type: none"> NIE事業を活用した人権教育・主権者教育の取組を2つ以上提案するとともに、今後も本校で継続的な取組を1つ以上確立した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> NIE事業を活用した人権教育の取組の1つとして1・2年次の廊下に新聞記事を掲示するという取組をおこなった。これにより、多様な意見を交換する場をつくることができた。また、この活動を今後とも継続可能な取組として確立することがある程度はできた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 多様な意見を交換する場を提供できたが、それを教科等の活動に明確につなげることはまだできていない。来年度は、公民科等と連携して教科活動における位置づけを明確にしたい。また、今年度できなかった主権者教育の日常的かつ継続的な取組を提案する。

②高い人間力の育成

担当	具体的方策	評価Aの基準	中間評価	最終取組結果	最終評価	結果の分析及び改善方策
生徒	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会が企画運営する蒼碑祭を充実させ、生徒も教員も一体感と感激を味わえる行事にする。 交通委員会を中心に、交通事故防止と削減に向けての取組を定期的に行う。 年に5回程度部長会を開催し、生徒会や部活動を中心に、生徒が主体的に規範意識を高めていく取組を行う。 ボランティア活動に積極的に参加し、公共心を育み、自己肯定感を持てる場を提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートで、 <ul style="list-style-type: none"> 「蒼碑祭に満足した」80%以上 「校則やマナーを守って生活できた」80%以上 「社会貢献活動に2回以上参加し、満足する取組ができた」80%以上 部長会を年間で5回開催した。 交通事故が昨年度より10%減少した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果より <ul style="list-style-type: none"> 蒼碑祭満足度 文化の部92.4% 体育の部93.9% 校則マナーを守る(服装、頭髪、スマホ、時間、交通など)平均90%超 社会貢献活動参加回数 2回以上58.2% 1回以上87.4% 社会貢献活動を通じて自分の成長を感じ満足できた80.0% 部長会を5回(1月現在)開催し、学校のリーダーを育成するとともに主体的に活動する質の高い集団づくりを行った。 交通事故報告件数が12件(昨年15件)であり、昨年より20%削減できた。 職員室前に社会貢献活動掲示板をつくり広報活動を行った。1年次生の積極的参加が目立ち、2年次生の参加が予想より少なかった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のアンケート結果から分析すると、自己評価が甘い気もするが概ね落ち着いた充実した生活ができていることが分かる。その中でも評価が低かったのが以下の項目であるので、次年度は対策を練ってルールやマナーを守る指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> スマホを校内で使用しない 守れていない約14% 自転車の並進 守れていない約16% 自転車の左側通行 守れていない約21% 引き続き高いレベルでの文武両道を目指し、主体的に活動する部活動を通じて人間的成長を図る。 交通事故件数の減少は、交通LHRやSHRで事故防止や交通マナーについて頻繁に呼びかけを行ったり、生徒課教員で立ち番指導を行ったりした効果と考える。次年度も引き続き実施し、事故撲滅をめざす。 社会貢献活動の案内が増え、業務が煩雑になってきているので、効率のよい方法を検討する。
保健安全	<ul style="list-style-type: none"> 清掃活動を全員で行う。 毎月の清掃点検を実施。 ゴミの削減に向けて分別と持ち帰りの呼びかけを継続。 生活委員の活動の活性化〔啓発ポスターの作成/定例会の実施〕を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> トイレを含む環境美化に対する学校評価が向上した。 全員清掃活動が定着した。 可燃物・不燃物のさらなる削減ができた。 生活委員のチェックで各清掃場所で「良好」が80%以上ある。 定例会を年間で3回実施できた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学校評価では、学校美化に関する肯定的な評価が、 <ul style="list-style-type: none"> 保護者：77.4%(昨年度、81.5%)、生徒：61.0%(昨年度、58.2%) 教員：74.7%(昨年度、59.4%)となった。 全員清掃活動を実施した。 トイレ清掃用の道具と洗剤をより効果の上がるものを導入した。 清掃点検で「良好」が5月は80%、7月は70%であった。 啓発ポスターを全クラスに掲示した。 定例会議を4回実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 校内美化に関して、教員の指導の意識は70%を超えているが、生徒の意識レベルがまだ低い。「自ら」という主体的な取組ができていない。保護者の評価も肯定的ではあるが、過年度と比較すると肯定的な評価は減少している。 経年劣化が原因の1つではあるが、日々の取組で対応できる部分も大きい。清掃点検の実施後、各担当へ点検結果をフィードバックするなど改善点を検討する。

教育相談	・アクティブ・ラーニング等の集団生活に順応しにくい特性（発達障害）を持つ生徒を継続的に支援する。 ・年次と相談室で指導内容を共有できるよう個別の支援計画等を作成し、利用できるようにする。	・発達障害を持つ生徒が自分の居場所および話せる友人を作り、学校生活を前向きに取り組むことができるようになる。 ・個別の支援計画等を作成・利用し、情報の共有ができた。	B	・生徒と対話していく中で居場所についても提示し、前向きに学校生活が取り組めるようなアドバイスを適宜行った。 ・生徒記録表を作成し、情報の共有を進めた。 ・スクールカウンセラーからも適宜、アドバイスをもらい活かすことができた。	B	・心の問題というのは、常にうまくいくとは限らず、逆にうまく行かないことの方が多いときもある。ただ、その都度、機に合ったアドバイスをしていく必要がある。
1年次	・生徒だけでなく教員を含めた年次団全体の一体感を醸成すべく、緊密な情報交換と協力的体制づくりを進める。 ・目の前のことに全力で取り組むことで、将来の目標にリアリティを持たせるようにする。	・アンケートで「学校生活満足度」の項目で、大変満足と満足の合計が85%以上であった。	B	・学校アンケートの結果は、肯定的回答が73.7%であり、目標に達していない。年次途中で進路変更した者が2名あった。 ・質問等には多くの生徒が訪れているが、来る者と来ない者とがはっきりしている。	B	・目の前のことに全力で取り組ませる中で、今やっていることが将来のどのような部分につながっているのか等の意義を丁寧に理解させる。 ・積極的に質問に来る生徒はいるが、特定の者になりつつある。教員に質問した生徒を、生徒同士の教え合いの場のリーダーにするなどして、学年全体への広がりを持たせ、さらに多くの生徒が職員室に集うことができるよう工夫する。
2年次	・担任を中心にクラスでの対話を大切に、クラスの状況を把握し、年次で情報交換し、年次全体の取り組みになるようにしていく。	・アンケートで「学校生活満足度」の項目で、大変満足と満足の合計が85%以上であった。	B	・学校アンケートの「学校生活に満足している」に対して、肯定的回答が67.7%であり、目標に達していない。	B	・学校アンケートの肯定的回答が少なかった項目を中心に教員が生徒とともに活動し、今以上に一体感を持って取り組んでいく。特に、「課題の量や内容」については、教科連携をさらに密にして調整を行い、生徒の満足度を上げていく。
3年次	・日々の教育活動を充実させ、TEAM42のスローガンを抱え、年次の教員全員の一体感から、学校行事・受験を中心に感激のある学校生活の実現を目指す。	・316人全員卒業 ・アンケートで「学校生活満足度」の項目で、大変満足と満足の合計が90%以上であった。	B	・病気療養中による長期欠席者を除く315名の卒業となった。 ・学校評価アンケートの結果から 芳泉高校での学校生活に満足している。あてはまる 56.2% ややあてはまる 23.7% 合計 79.9%。 全体平均 40.9%・32.9% 計73.8% を大きく超えている。卒業時のアンケートでも昨年同様の結果となる見込み。	B	・年次教員の一体感のもと、生徒にも一体感が生まれ、満足度も高くなった。不登校傾向にある生徒は年次進行に従い増加傾向であったが、担任の先生の粘り強い指導と家庭との連携で卒業することができた。早期の対応と粘り強い対応が今後も必要である。
グローバル人材育成推進委員会	・海外大学への進学や、海外留学についての情報を、これまで以上に生徒に提供するよう努める。 ・日常的な交流や共同研究活動といった学術的交流を視野に入れた形での海外姉妹校締結にむけた取組を行う。 ・生徒に異文化理解の意識を促すような機会を設定する。	・海外留学や進学の斡旋団体から適切な情報を手に入れ、生徒に紹介ができた。 ・海外姉妹校締結ができた。 ・異文化理解への関心を持たせる機会を3回以上実施できた。	B	・海外留学や進学の斡旋団体から適切な情報を手に入れ、生徒・保護者約30名に紹介できた。 ・姉妹校締結については、相手校の事情により計画通りの訪問ができず、まだ交渉継続中である。 ・異文化理解への関心を持たせる機会は年間を通じて3回実施できた。	B	・校内で行っている生徒向けの国際理解や海外留学へ目を向けるための取り組みは次年度も継続する。 ・姉妹校については、訪問日が決定次第、具体的な交渉に入りたい。そのための準備をしておく必要がある。
人権教育推進委員会	・A Lと人権教育・主権者教育の連携を明示する。 ・本校教育活動の人権教育・主権者教育の観点からの位置付けを明確化し、生徒・職員に示す。	・人権教育・主権者教育の外部研修に異なる5つの教科の教員が参加した。 ・従来の取り組みを整理し、人権教育・主権者教育の観点から、他の校内分掌と持続的に連携できる取り組みを2つ以上増やした。	B	・人権教育・主権者教育の外部研修に異なる5つ以上の教科の教員が参加した。 ・人権教育LHRについて、教育相談室・生徒課・保健安全課・情報企画課と連携して実施し、継続的な連携の場を形成することができた。	B	・人権教育については複数の分掌との連携の場をつくることができ、負担軽減にも貢献することができた。しかし、主権者教育については他分掌との連携を考えることができていない。来年度は主権者教育という観点からの連携を検討する。

③生徒と向き合う時間の確保

担当	具体的方策	評価Aの基準	中間評価	最終取組結果	最終評価	結果の分析及び改善方策
総務	・メール配信システムで保護者宛プリント配布情報などの年次連絡を行い、保護者との連携を強化する。 ・「気宇広大」人育成講話の講師など学校の教育活動を支援して下さる芳泉サポーターズの登録者を増やす。	・学校評価アンケートで「学校からの連絡などが伝わっているか」で、肯定的評価が70%以上となった。 ・芳泉サポーターズの登録者が昨年度比10%増加した。	B	・学校評価アンケートで「学校からの連絡などが伝わっているか」に対しては、肯定的評価が約8割であった。 ・芳泉サポーターズについては、前年度87名に対し、今年度は89名であり、10%増とはならなかった。	B	・生徒が「文書を保護者に渡している」というのは、約7割であり、メール配信によって補われていると考える。また、芳泉サポーターズについて、来年度は案内文書をわかりやすくするなどの工夫を行う。
教務	・学校管理システムのマニュアルを時系列に整理するなど利用しやすく改善することで、システムの効率的な運用を行い、教員の負担軽減を図る。	・教員アンケートで、「学校管理システムが利用しやすくなった」が70%以上となった。	B	・管理システムマニュアルについて、項目別にして電子掲示板に掲載した。また、使用時期に合わせて年次ホワイトボードに掲示することで、システム運用についてはスムーズにできている。 ・学校アンケート「学校管理システムが利用しやすくなった」については肯定的回答が31.0%と低調であった。	B	・管理システムの利用のしやすさについては、業務集中時に処理時間がかかることなど本校の努力ではどうにもできないこともあり、アンケートの問い方を検討すべきと考えた。 ・マニュアルについては、現在のものに加え、年間の処理の流れが1枚の紙で分かるものを作成する。
進路	・業務の統合を行い、生徒と向き合う時間の確保を図る。 ・学校アンケートへの進路アンケート（1、2年次）を組込む。	・受験指導として総合的な指導体制が確立された。 ・教科連携会議が難関大学指導を主管できた。 ・学校アンケートで進路のアンケートが実施できた。	B	・難関大学指導、小論文指導の体制を年度当初に見直し、実施している。 ・難関大学指導チームを教科連携会議に統合した。 ・活動記録のためのアンケートが必要になり、各期ごとに調査を行ったため、進路独自のアンケートを継続することとした。	B	・業務の統合による影響を分析し、より効率的な業務運営を企画していく。
図書	・読書アンケートの集計方法と質問項目を改善する。	・読書アンケートのなかの数値化する部分をスキャナー読み取りできる方式に変更された。	B	・質問項目を精選し、回答用紙をスキャナー読み取りする形式に変更し、読書アンケートを実施した。	A	・クラス集計していた図書委員の作業時間が大幅に削減された。生徒の意見が次年度にむけた改善につながるよう活用したい。
情報企画	・ネットワーク分離に対応するため、各教科の準備室での教材作成環境の整備を行う。	・セキュリティレベルを遵守し、各準備室で教材が作成できるようになった。	A	・ネットワーク分離後の各準備室でのネットワーク構築を行い、デスクトップ、ノートPC、wintab、ipadを配置できた。セキュリティレベルを遵守して教材研究ができた。	A	・各準備室で教材研究を行う環境整備が進んでいるが、より充実したものにしていく。
学校改革推進委員会	・校内分掌のスリム化について、教員アンケート等をもとに検討する。	・校内分掌のスリム化が実施できた。	B	・学校改革推進委員会で各分掌の業務内容の削減案並びに現在の8つの課・室を6つに再編することができた。	A	・課室のスリム化は実施できたが、委員会など他の分掌についてはスリム化の検討が出来なかった。次年度は委員会などの分掌スリム化について検討する。
事務	・ふるさと岡山“学び舎”事業を活用し、本校の教育環境を整備する。	・寄附金目標額（単年）の75%が達成できた。	C	・4月に寄附金の活用プランを策定（県立学校で10番目）した。「生徒昇降口」リニューアル：目標額 700万円（2年間） ・5月にチラシやHPを作成し、PTA総会で協力を依頼した。 ・6月に住民税の通知にあわせ、校内webで協力を依頼した。 ・8月に同窓会総会や職員会議で、寄附の呼び掛けをした。 ・12月に保護者代表から卒業記念寄附の協力を依頼した。 ・寄附金額は、12月末現在で目標の20%程度である。	C	・全県的にも寄附は低調であるが、今後も保護者をはじめ同窓会や企業、個人に対して効果的な周知に努めたい。 ・現在の計画は、平成30年度までとしているが、プランの内容や実施時期を見直す。